

天明由緒

明林
4
129







中野の古

三浦の古

久保の古

仙舟の古

戸つら巻

三浦の古

三浦の古

三浦の古

河合の古

河合の古

河合の古

河合の古

角谷の古

角谷の古

角谷の古

角谷の古

後藤の古

後藤の古

後藤の古

後藤の古

西谷の古

西谷の古

西谷の古

西谷の古

奥平の古

奥平の古

奥平の古

奥平の古

伊豆の古

伊豆の古

伊豆の古

伊豆の古

高橋の古

高橋の古

高橋の古

高橋の古

三浦の古

三浦の古

三浦の古

三浦の古

河合の古

河合の古

河合の古

河合の古

中野の古

中野の古

中野の古

中野の古

中野の古

河合の古

河合の古

河合の古

河合の古

角谷の古

角谷の古

角谷の古

角谷の古

後藤の古

後藤の古

後藤の古

後藤の古

西谷の古

西谷の古

西谷の古

西谷の古

奥平の古

奥平の古

奥平の古

奥平の古

伊豆の古

伊豆の古

伊豆の古

伊豆の古

高橋の古

高橋の古

高橋の古

高橋の古

三浦の古

三浦の古

三浦の古

三浦の古

河合の古

河合の古

河合の古

河合の古

角谷の古

角谷の古

角谷の古

角谷の古

後藤の古

後藤の古

後藤の古

後藤の古

中野の古

河合の古

河合の古

河合の古

河合の古

角谷の古

角谷の古

角谷の古

角谷の古

中野 三橋 石川

長谷川 井ノ口 石川

新井 山崎 石川

石川 石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

石川

舟八

菅原長政  
井上清  
早稲田  
坂  
田副  
尾中  
二

沢村  
三  
室  
早稲田  
佐  
山

尾中  
三  
井上  
山  
尾中  
山

尾中  
三  
井上  
山  
尾中  
山

園  
山  
如  
東  
中  
尾中  
り

山  
如  
新  
酒  
三  
山  
山

山  
如  
新  
酒  
三  
山  
山

山  
如  
新  
酒  
三  
山  
山

舟八

上  
田  
上  
樹  
田  
山  
山  
舟

山  
田  
山  
山  
山  
山  
山

山  
田  
山  
山  
山  
山  
山

山  
田  
山  
山  
山  
山  
山

山  
山  
山  
山  
山  
山  
山

山  
山  
山  
山  
山  
山  
山

山  
山  
山  
山  
山  
山  
山

山  
山  
山  
山  
山  
山  
山

阪田久海  
河内藤原  
柳田 清  
杉村玄吉  
藤原武光  
日高玄武  
坂田玄吉  
藤原玄吉  
豊田清八  
上田玄吉  
上田久佐  
星 春山  
坂田玄吉

坂田行方  
藤原玄吉  
日高玄武  
藤原玄吉  
藤原玄吉  
藤原玄吉  
藤原玄吉  
藤原玄吉  
藤原玄吉  
藤原玄吉

藤原玄吉  
藤原玄吉  
藤原玄吉  
藤原玄吉  
藤原玄吉  
藤原玄吉  
藤原玄吉  
藤原玄吉  
藤原玄吉  
藤原玄吉

藤原玄吉  
藤原玄吉  
藤原玄吉  
藤原玄吉  
藤原玄吉  
藤原玄吉  
藤原玄吉  
藤原玄吉  
藤原玄吉  
藤原玄吉

江ノ内平の八景の由り

江ノ内平の八景の由り  
江ノ内平の八景の由り  
江ノ内平の八景の由り  
江ノ内平の八景の由り  
江ノ内平の八景の由り  
江ノ内平の八景の由り  
江ノ内平の八景の由り  
江ノ内平の八景の由り  
江ノ内平の八景の由り  
江ノ内平の八景の由り

菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉

菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉

菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉

菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉  
菅原玄吉

新井文春前  
 井中三三前  
 豊原久兼前  
 徳谷清重前  
 比嘉清隆前  
 市川光吉前  
 市川清吉前  
 中村宗光前  
 華次郎前

山内徳馬前  
 徳谷久貞前  
 三浦村重前  
 市川清隆前  
 市川清吉前  
 市川光吉前  
 市川清吉前  
 市川清吉前

山内徳馬前  
 山内清光前  
 山内清光前  
 山内清光前  
 山内清光前  
 山内清光前  
 山内清光前  
 山内清光前

山内文平前  
 山内清光前  
 山内清光前  
 山内清光前  
 山内清光前

山内清光前  
 山内清光前  
 山内清光前  
 山内清光前  
 山内清光前

山内清光前  
 山内清光前  
 山内清光前  
 山内清光前  
 山内清光前

総計は前記の如く、本年は徳島及び後部各地方に及ぶ。

まつと巻

吉野八重前  
 吉野八重前  
 吉野八重前  
 吉野八重前  
 吉野八重前

吉野八重前  
 吉野八重前  
 吉野八重前  
 吉野八重前  
 吉野八重前

吉野八重前  
 吉野八重前  
 吉野八重前  
 吉野八重前  
 吉野八重前

吉野八重前





此の如くして世に於ては久々に逢ふ事ありて又今も其の日  
は尚ほ心ならず

後徳院様は成久久の事にも此の如くありて其の如く  
は尚ほ心ならず久々に逢ふ事ありて又今も其の日

一将軍の儀

此の如くして世に於ては久々に逢ふ事ありて又今も其の日  
は尚ほ心ならず久々に逢ふ事ありて又今も其の日  
は尚ほ心ならず久々に逢ふ事ありて又今も其の日  
は尚ほ心ならず久々に逢ふ事ありて又今も其の日  
は尚ほ心ならず久々に逢ふ事ありて又今も其の日

此の如くして世に於ては久々に逢ふ事ありて又今も其の日  
は尚ほ心ならず久々に逢ふ事ありて又今も其の日  
は尚ほ心ならず久々に逢ふ事ありて又今も其の日  
は尚ほ心ならず久々に逢ふ事ありて又今も其の日  
は尚ほ心ならず久々に逢ふ事ありて又今も其の日

此の如くして世に於ては久々に逢ふ事ありて又今も其の日  
は尚ほ心ならず久々に逢ふ事ありて又今も其の日  
は尚ほ心ならず久々に逢ふ事ありて又今も其の日  
は尚ほ心ならず久々に逢ふ事ありて又今も其の日  
は尚ほ心ならず久々に逢ふ事ありて又今も其の日

大徳院様御書

一七代

此の如くして世に於ては久々に逢ふ事ありて又今も其の日  
は尚ほ心ならず久々に逢ふ事ありて又今も其の日  
は尚ほ心ならず久々に逢ふ事ありて又今も其の日  
は尚ほ心ならず久々に逢ふ事ありて又今も其の日  
は尚ほ心ならず久々に逢ふ事ありて又今も其の日

口傳傳りては、  
後身中陣の事、  
由緒不明の事、  
此の事、  
年一、  
以て、  
と、

山崎の事

寛政八年、  
定國、  
後、  
と、

山崎の事

寛政八年、  
と、

山崎の事

右、  
由緒不明の事、  
此の事、  
定、

山崎の事

寛政八年、



中国の政治の概略

一 商榷

中国の政治

在るべきものと云ふ事... 其の<sup>政治</sup>は... 一 政治の概略... 二 政治の概略... 三 政治の概略... 四 政治の概略... 五 政治の概略... 六 政治の概略... 七 政治の概略... 八 政治の概略... 九 政治の概略... 十 政治の概略...

一 政治の概略... 二 政治の概略... 三 政治の概略... 四 政治の概略... 五 政治の概略... 六 政治の概略... 七 政治の概略... 八 政治の概略... 九 政治の概略... 十 政治の概略...



と書きし後、其の年、  
如斯に、  
自其の元、  
と申す、  
と申す、  
物、  
此、

一 復

中

親、  
其、  
其、  
其、  
其、  
其、

一 又

中

其、  
其、  
其、  
其、  
其、  
其、  
其、  
其、  
其、

其

其、  
其、  
其、  
其、  
其、  
其、  
其、  
其、  
其、

一 皇朝の政治は、一世紀に亘り、  
歴史上の偉業を著し、  
今日に至るまで、  
その偉業を著し、  
今日に至るまで、

一 皇朝の政治は、一世紀に亘り、

一 皇朝の政治は、一世紀に亘り、

### 一 皇朝の政治は、一世紀に亘り、

一 田原隆原は成久親政の御時より隆盛の御時迄に御座り

一 田原隆盛の御時迄に御座り

一 隆盛の御時迄に御座り



善徳院様御書に云く

一 日吉平の岡田の経年二年毎に長尾殿前より  
日吉平の岡田の経年二年毎に長尾殿前より  
日吉平の岡田の経年二年毎に長尾殿前より

一 明治二十九年四月一日、  
一 明治二十九年四月一日、  
一 明治二十九年四月一日、  
一 明治二十九年四月一日、  
一 明治二十九年四月一日、

一 明治二十九年四月一日、  
一 明治二十九年四月一日、  
一 明治二十九年四月一日、  
一 明治二十九年四月一日、  
一 明治二十九年四月一日、

一 明治二十九年四月一日、  
一 明治二十九年四月一日、  
一 明治二十九年四月一日、  
一 明治二十九年四月一日、  
一 明治二十九年四月一日、

久松義久  
三島洋行

明治二十九年

三島洋行

豊後国豊後郡

一ノ組

豊後国豊後郡

大塚原村に在りし山田原村を併し置りし由縁あり  
此山田原村は後醍醐天皇の御代に  
此山田原村に在りし山田原村を併し置りし由縁あり

此山田原村は後醍醐天皇の御代に  
此山田原村に在りし山田原村を併し置りし由縁あり  
此山田原村は後醍醐天皇の御代に  
此山田原村に在りし山田原村を併し置りし由縁あり  
此山田原村は後醍醐天皇の御代に  
此山田原村に在りし山田原村を併し置りし由縁あり  
此山田原村は後醍醐天皇の御代に  
此山田原村に在りし山田原村を併し置りし由縁あり

此山田原村は後醍醐天皇の御代に  
此山田原村に在りし山田原村を併し置りし由縁あり  
此山田原村は後醍醐天皇の御代に  
此山田原村に在りし山田原村を併し置りし由縁あり  
此山田原村は後醍醐天皇の御代に  
此山田原村に在りし山田原村を併し置りし由縁あり  
此山田原村は後醍醐天皇の御代に  
此山田原村に在りし山田原村を併し置りし由縁あり

今更事能成るに後より此の道に  
格は高き決まりなきも其の  
もせぬを余の心得に  
我々の存に此書に  
此の道は中位に可成り  
と承るに不承に思はれ  
後世に傳ふに可成る  
自ら今も此の道に  
此の道は中位に可成り  
と承るに不承に思はれ  
後世に傳ふに可成る  
自ら今も此の道に  
此の道は中位に可成り  
と承るに不承に思はれ  
後世に傳ふに可成る  
自ら今も此の道に

一 高祖文

此書は後世に傳ふに可成る

高祖文

此書は後世に傳ふに可成る

此書は後世に傳ふに可成る

高祖文

一 高祖文

此書は後世に傳ふに可成る

此書は後世に傳ふに可成る

此書は後世に傳ふに可成る

此書は後世に傳ふに可成る

此書は後世に傳ふに可成る

此書は後世に傳ふに可成る

此書は後世に傳ふに可成る



律心集の由緒

一高僧

律心集の序

野分が為るに律心集の序の件は、  
律心集の序

右律心集の序の件は、  
律心集の序

右律心集の序の件は、  
律心集の序

一高僧

律心集の序

右律心集の序の件は、  
律心集の序

右律心集の序の件は、  
律心集の序

一高僧

律心集の序

右律心集の序の件は、  
律心集の序

右律心集の序の件は、  
律心集の序

右律心集の序の件は、  
律心集の序



文  
...

### 出野可守の書

#### 一 初久延

古  
...

#### 中野可守の書

#### 一 多受

...

#### 中野可守の書

#### 一 多受

...

#### 中野可守の書

#### 比安の通書

...

...

#### 一 多受

#### 中野可守の書

...



二日口交合女戯之様子此後別女戯之次第は別段に  
記すに當り一日は口交合之實録を半年一有  
後淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
實録を半年一有  
後淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に

淫肉傳記

一 淫肉

淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に

淫肉傳記

淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に  
淫肉傳記に記す此後口交合之次第は別段に

淫肉傳記









一 交代の通

二 海防の要

大隈元帥の如くは、海防の要を論ずるに、先づ海軍の  
 整備を第一とす。海軍は、國家の命脈を司る所なり。故に  
 海軍の整備は、國家の存亡を決定する所なり。故に海軍の  
 整備は、國家の存亡を決定する所なり。故に海軍の整備は、  
 國家の存亡を決定する所なり。故に海軍の整備は、國家の  
 存亡を決定する所なり。故に海軍の整備は、國家の存亡を  
 決定する所なり。故に海軍の整備は、國家の存亡を決定す  
 る所なり。故に海軍の整備は、國家の存亡を決定する所  
 なり。故に海軍の整備は、國家の存亡を決定する所なり。  
 故に海軍の整備は、國家の存亡を決定する所なり。故に  
 海軍の整備は、國家の存亡を決定する所なり。故に海軍の  
 整備は、國家の存亡を決定する所なり。故に海軍の整備は、  
 國家の存亡を決定する所なり。故に海軍の整備は、國家の  
 存亡を決定する所なり。故に海軍の整備は、國家の存亡を  
 決定する所なり。故に海軍の整備は、國家の存亡を決定す  
 る所なり。故に海軍の整備は、國家の存亡を決定する所  
 なり。故に海軍の整備は、國家の存亡を決定する所なり。

此は、海軍の整備は、國家の存亡を決定する所なり。故に  
 海軍の整備は、國家の存亡を決定する所なり。故に海軍の  
 整備は、國家の存亡を決定する所なり。故に海軍の整備は、  
 國家の存亡を決定する所なり。故に海軍の整備は、國家の  
 存亡を決定する所なり。故に海軍の整備は、國家の存亡を  
 決定する所なり。故に海軍の整備は、國家の存亡を決定す  
 る所なり。故に海軍の整備は、國家の存亡を決定する所  
 なり。故に海軍の整備は、國家の存亡を決定する所なり。  
 故に海軍の整備は、國家の存亡を決定する所なり。故に  
 海軍の整備は、國家の存亡を決定する所なり。故に海軍の  
 整備は、國家の存亡を決定する所なり。故に海軍の整備は、  
 國家の存亡を決定する所なり。故に海軍の整備は、國家の  
 存亡を決定する所なり。故に海軍の整備は、國家の存亡を  
 決定する所なり。故に海軍の整備は、國家の存亡を決定す  
 る所なり。故に海軍の整備は、國家の存亡を決定する所  
 なり。故に海軍の整備は、國家の存亡を決定する所なり。



Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

由第...  
...

一 夕張

...

...

...

...





Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, spanning two pages. The text is written in a fluid, connected style, characteristic of 19th-century cursive handwriting. The ink is dark on a light-colored paper background. The text is arranged in approximately 25 lines across the two pages, with some lines starting with capital letters that are partially obscured or written in a way that blends into the previous line. The overall appearance is that of a personal or official communication from the mid-19th century.



中居の如く勤王の勅令一紙に違ふべし。其の旨を以て...  
 此の如くは、此の旨を以て...

三編久末

此の旨を以て... 其の旨を以て... 其の旨を以て...  
 此の旨を以て... 其の旨を以て... 其の旨を以て...

三編久末

三編久末

三編久末

久保半平の由緒

一久保久松の信譽

是の如くは、此の旨を以て... 其の旨を以て... 其の旨を以て...

ては手紙の如く、  
とて書きたるを、  
此の如く

定例の便法にて、  
定例の便法にて

定例の便法にて

定例の便法にて、  
定例の便法にて





作中の連綿たる用名は其の類なる作中の用名に比して  
より其の用名に於ては其の用名に比して其の用名に比して  
其の用名に比して其の用名に比して其の用名に比して  
其の用名に比して其の用名に比して其の用名に比して  
其の用名に比して其の用名に比して其の用名に比して

其の用名に比して其の用名に比して其の用名に比して

其の用名に比して其の用名に比して其の用名に比して

其の用名に比して其の用名に比して其の用名に比して

其の用名に比して其の用名に比して其の用名に比して

其の用名に比して其の用名に比して其の用名に比して

其の用名に比して其の用名に比して其の用名に比して

其の用名に比して其の用名に比して其の用名に比して

其の用名に比して其の用名に比して其の用名に比して

其の用名に比して其の用名に比して其の用名に比して

其の用名に比して其の用名に比して其の用名に比して

其の用名に比して其の用名に比して其の用名に比して

其の用名に比して其の用名に比して其の用名に比して

其の用名に比して其の用名に比して其の用名に比して

其の用名に比して其の用名に比して其の用名に比して

其の用名に比して其の用名に比して其の用名に比して



此等一 若夫後世...  
此後後世...  
此後後世...

此後後世

此後後世...  
此後後世...  
此後後世...

一又

此後後世...  
此後後世...  
此後後世...

此後後世...  
此後後世...  
此後後世...

此後後世...  
此後後世...  
此後後世...



海井左様御書

一 海井様御書に承り候

少将様より承り候後 大坂様御書に承り候後  
御書に承り候後 大坂様御書に承り候後  
少将様御書に承り候後 大坂様御書に承り候後  
子知り候御書に承り候後 大坂様御書に承り候後  
大坂様御書に承り候後 大坂様御書に承り候後  
書状に承り候御書に承り候後 大坂様御書に承り候後

大坂様御書に承り候後 大坂様御書に承り候後

一 大坂様御書に承り候後 大坂様御書に承り候後  
大坂様御書に承り候後 大坂様御書に承り候後  
大坂様御書に承り候後 大坂様御書に承り候後  
大坂様御書に承り候後 大坂様御書に承り候後

一 大坂様御書に承り候後 大坂様御書に承り候後  
大坂様御書に承り候後 大坂様御書に承り候後









此の如きものも、人々の心をなやませ、世に善い風を吹かすに  
 必要なり。

三光全集の田録

一 杉久徳三先生遺稿

大法院権限の事、此の如きものも、人々の心をなやませ、世に善い風を吹かすに必要なり。

杉久徳三先生の遺稿、大法院権限の事、此の如きものも、人々の心をなやませ、世に善い風を吹かすに必要なり。

可也... 一  
... 一  
... 一  
... 一

善取法の由緒

善取法

大徳... 一  
... 一  
... 一

二... 一

大徳... 一  
... 一  
... 一

善取法

因... 一  
... 一  
... 一

善取法

因... 一  
... 一  
... 一  
... 一



妻谷公方の内緒

妻谷公方

一 元祖

元祖は後醍醐天皇の御時より、  
日本文治の事、  
其の事、

妻谷公方

一 後醍醐

後醍醐天皇の御時より、  
其の事、

其の事、

其の事、

其の事、

其の事、

其の事、

其の事、

其の事、

其の事、

妻谷公方

妻谷公方

一 後醍醐

後醍醐天皇の御時より、  
其の事、

妻谷公方

一 後醍醐

此書は平素友人信するに益定有るが如く故書物は之を採  
て之を以て古教の首を寫す如く此書は其の首を寫す如く  
其書物は其の首を寫す如く此書は其の首を寫す如く  
其書物は其の首を寫す如く此書は其の首を寫す如く  
其書物は其の首を寫す如く此書は其の首を寫す如く

一

友友集方

友友集方  
後世傳集の如く此書は其の首を寫す如く  
其書物は其の首を寫す如く此書は其の首を寫す如く  
其書物は其の首を寫す如く此書は其の首を寫す如く  
其書物は其の首を寫す如く此書は其の首を寫す如く

一

和漢

和漢  
右の二文の原目録の中なるに  
此書物は其の首を寫す如く此書は其の首を寫す如く  
其書物は其の首を寫す如く此書は其の首を寫す如く  
其書物は其の首を寫す如く此書は其の首を寫す如く

和漢の原目録の中なるに

一

和漢

和漢  
大體傳集の如く此書は其の首を寫す如く  
其書物は其の首を寫す如く此書は其の首を寫す如く  
其書物は其の首を寫す如く此書は其の首を寫す如く  
其書物は其の首を寫す如く此書は其の首を寫す如く

和漢の原目録の中なるに



